

若者（学生）からの意見聴取

1 趣 旨

本市では、東京圏に対する社会減の状況が続いており、特に大学への就学期・就職期の年代の若者が東京圏へ流出する傾向があります。こうした課題に対し、若者（学生）ならではの視点を取り入れ、若者にとって名古屋市が魅力的なまちとなるための施策展開が必要となります。

そこで、総務局総合調整室が実施する「なごや学生社会課題解決プログラム」において、若者（学生）の視点を通じた若い世代が住みたくなるまちづくりについて、意見聴取を行いました。

2 実施概要

（1）テーマ

「若い世代が住みたくなるまち」ってどんなまち？

（2）実施状況

日時・時期	区 分
令和4年9月2日	キックオフイベント
令和4年9月～12月	活動期間
令和5年2月4日	成果報告イベント

（3）参加者

「なごや学生社会課題解決プログラム」参加者のうち、（1）のテーマに取り組むこととなったチーム※の学生8名（大学2～4年生、以下「参加学生」とする。）

※「漢字の『福』をイメージし、名古屋市の課題解決から福のある社会に導きたい！」という思いから、「ふくろう」というチーム名で活動しました。

3 意見聴取の流れ

（1）キックオフイベント

- 参加学生が初めてチームのメンバーと顔合わせをしました。アイスブレイクを通じて、大学も学年も出身も違う学生同士の交流を深めました。
- 本テーマを掲げた理由や名古屋の現状について、市職員から説明を行い、参加学生とイメージを共有しました。



(2) 活動期間

- ・参加学生は、対面やオンラインによるミーティング、市職員との意見交換等を重ねて、名古屋市の現状・課題・その背景を分析するとともに、若い世代が住み続けられるまちの姿を検討し、仮説を立てました。
- ・仮説を検証するために、同世代へのアンケート調査を行ったり、市内各所で開催された複数の交流会に参加しインタビューを行ったりするなど、積極的に活動を展開しました。



(3) 成果報告イベント

- ・参加学生は、これまでの活動によって得られた成果をまとめ、中田副市長をはじめとする市職員や他チームの前でプレゼンテーションを行いました。
- ・クロージングワークショップにおいて、改めて「なごやの魅力をもっと高めるには？」というテーマでトークセッションを行いました。



4 若者（学生）からの意見

仮説1 子育てを大事にするまち

(1) 仮説を考えた理由

- ・名古屋市も直面している長期的な出生率の低下による人口減少社会の今、子育てを大事にするまちは若者にとって魅力的なまちに映るのではないかと。

(2) 仮説の検証

- ・グーグルフォームによるアンケート調査及び「ソーネおおぞね」でのヒアリング調査の結果、子育てには「金銭面」「子育てと仕事の両立」「子育て環境（ワンオペ育児等）」などの悩みがあることが分かった。また、子育ての悩みが解決されるまちに移り住みたいと思う人の割合が約8割であることが分かった。

(3) 結論

- ・子育てに関する「金銭面」と「子育てと仕事の両立」という2つの悩みは密接につながっており、2つの側面から課題を解決する必要がある。
- ・名古屋市の「企業数が多い」「人口が多い」という2つの特色を生かした解決に取り組む必要がある。

仮説2 学生がまちづくりに関われるまち

(1) 仮説を考えた理由

- ・若者が住み続けたくなるには愛着が必要であり、愛着が湧くにはまちづくりの主体になる必要があるのではないか。

(2) 仮説の検証

- ・グーグルフォームによるアンケート調査によると、今後まちづくりを行いたいと思っている若者は約7割と予想していたよりも多かった。
- ・名古屋に関係の深い若者へのインタビュー調査では、まちづくりに取り組むことが名古屋に対する愛着やシビックプライドを生みだすことに繋がるといった意見や、人をまちにつなぎとめる役割を担うのは人であるといった重要なヒントを得た。

(3) 結論

- ・学生によるまちづくりを推進するとともに、人との繋がりをつくることが求められる。
- ・インタビュー調査から、名古屋の保守的な体質の問題が浮き彫りになったことから、「地元のまとまりがある」などといった名古屋のいい面を残しつつ、転入者や若者も気軽にまちづくりに参画できるような状態に変えていく必要がある。

仮説3 多文化交流が盛んなまち

(1) 仮説の検証

- ・名古屋市に住む学生を対象としたグーグルフォームによるアンケート調査によると、多文化交流イベントに興味がある学生が約7割と予想していたよりも多く、将来住み続けるまちを考える上で多文化交流が盛んであることを重視する学生が過半数いることが分かった。
- ・外国人留学生との異文化交流会に参加しインタビュー調査を行ったところ、市民と外国人が気軽に交流できるスペース、広場のようなものがあるといいといった意見があった。

(2) 結論

- ・将来にわたり住み続けられるまちを考える上で、多文化交流が盛んであることを重視する学生が多いと言える。
- ・名古屋には外国人が多いという特色があるが、多文化交流等のイベントに関する情報に触れる機会が少なく、名古屋は多文化交流が盛んではないと感じている学生が多数いることが課題として見えてきたことから、多文化交流イベントを増やすことや、市民と外国人が気軽に交流できるスペースの確保に加え、あらゆる学生に情報が届くような発信をする必要がある。

まとめ

- ・名古屋の大学に通う学生に将来住み続けたいと思ってもらうためには、人と社会の繋がりを強めることで、地域への愛着を感じてもらうことが大切。
- ・世代のニーズに応えながら、特色を活かしたまちづくりを行う姿勢が大切。



▲ 成果報告イベントでの発表を終えた、チーム「ふくろう」の皆さん